

辻由美著「読書教育 - フランスの活気ある現場から - 」

みすず書房 2008年4月8日刊を読む

読書アクション

読書にテーマ性をあたえれば、それは興味をかきたてる刺激剤になりうる。

ひとつのテーマについて、神話、童話、歴史もの、科学ものなどジャンルを超えてとりくむというのはよいアイデアだ。子どもたちは自分の好みに応じて本の選択をすることができ、しかも共通の話題がもてる。

調べものの方法は多様でなければならないことを実感した。あるテーマについて調べるのに、本を参考にしたり、絵画や彫刻を観察したり、街頭に出てインタビューするなど、アプローチを変化させれば、子どもたちの興味に幅と深みが出てくる。

毎朝、子どもたちが、自分が読んだ本を紹介するというのがよかった。継続させてゆきたい。

読書アクションでは、ある本について先生がまったく介入せずに子どもたちに自由に議論させる時間をつくった。それは今後もつづけてゆきたい。

P12 ~ 13

高校生ゴンクール賞

参加クラスの生徒は候補作をぜんぶ読む、というのは高校生ゴンクール賞のルールのひとつだ。だが、クラス全員が全作品を読了することは実際にはほとんどありえず、読書についてどういう基準をもうけるかは、担当教師によって異なる。

「50 ページ読んでも、どうしても興味のわいてこない本は、あなたの心を動かさなかった本ですから、それ以上読まなくてもいいです。でも、表紙を見ただけで放棄することはやめてほしい。候補作のうち最低3冊は読みなさい。わたしは生徒たちにそう言いました」

P60

フランスの学校の職員室

わたしは小学校から高校までフランスのいろいろな学校を訪問したが、どこへ行っても、日本の学校といちばん違うと感じたのは、教員室だ。ただテーブルが置かれているだけのじつに殺風景な場所で、テーブルの上にはほとんど何もなし、教員室で仕事をしている教師の姿はめったに見かけない。

小学校では、教室に先生用のカギのかかる物入れがあって、教材や持ち物はそこに入れる。休み時間に教員室にきて、コーヒーを飲んだり、雑談をしたりする先生もいるが、ほとんど教員室に足を踏み入れない先生もいる。パリ十六区の小学校の先生をしているわたしの友人は、

特に用事がない限り教員室には顔を出さず、休み時間はたいてい教室です。

P10 ~ 11

[コメント]

フランスにおける読書教育の実験は、日本や世界の教育の授業に大いに参考になる。学力は、豊かな読書により身につく。

- 2009 年 4 月 28 日林明夫記 -